

## 『跳べ！サトルツツ！』 シノブシス

脚本：初稿(2006年12月)→10稿(2007年9月)

佐々木サトル(33)は大手食品会社のハヤシ食品で働く少々冴えない独身のサラリーマン。一方、同じハヤシ食品で働く浜田稔(37)は、妻の由美(31)と娘の沙織(6)と暮らすエリート社員。彼は、部下の鈴木美弥子(25)と不倫中の関係にあった。

ある日、サトルは取引先に仕事上のミスを詫びに行く。その帰り道で、昔憧れていた浜田の妻、由美と偶然再会する。彼女は中田敬子(25)、高梨一平(23)がコーチを務めるスケート教室に娘を通わせており、その迎えに行くところだった。支配人で敬子の父親の紘一郎(55)に強く勧誘され、サトルはフィギュアスケートの社会人クラスに通い始める。いつか娘とペアダンスを踊るのを夢見ている大蔵浩介(45)ら楽しい仲間も得て、サトルはフィギュアスケートの魅力に引き込まれる。

浜田は、虚栄心が強い由美の性格もあり、家族を蔑ろにし、美弥子と不倫を続けながらも、外資企業 USN 社との提携という大仕事に没頭する。

一方、美弥子は妻から浮気の疑いを持たれた浜田から、一時、距離を置きたい、と提案され、心寂しさから浜田の娘が通うスケートリンクを覗きに行く。美弥子を思慕していたサトルが彼女を偶然見つけてしまい、彼女はスケート教室に通う羽目になる。美弥子は、サトルが趣味のフィギュアスケートを楽しみ、誠実に仕事に取り組む姿に徐々に惹かれていく。そして、流されがちだった自分を省みて、一旦は浜田との別れを決意する。彼女はサトルのコンビネーションジャンプを勝手に「サトルツツ」と命名した。

フィギュアスケートのアマチュア大会前の練習で、突然、スケート仲間の大蔵が倒れる。彼は、娘が実は福岡におり、長年連絡も取っていない事を白状し、サトルに彼女の様子を見に行つて欲しいと懇願する。サトルは帰省がてら大蔵の娘、チエ(17)を探すが、結果は芳しいものではなかった。

突然、提携先の外資企業 USN 社の裏切りにより、ハヤシ食品が USN 社に買収されることになる。社内の立場を失った浜田は、行き場をなくして彷徨し、家族の元でなく美弥子に救いを求める。

由美は帰宅しない夫の行方を心配し、サトルに相談してくる。サトルは美弥子の家を訪れ、彼女と浜田との関係を知ることになる。サトルは悲嘆し、公園で一人フィギュアスケートの演技を模して走り回り、泥だらけになるが、爽快な笑顔になる。

その時、浜田の娘、沙織が行方不明になったと由美からサトルへ連絡が入る。サトルと美弥子は公園で一人フィギュアスケートの練習をする沙織を探し出す。サトルは美弥子への思いを伝え、来週の大会を見に来て欲しいと伝えるが、美弥子はそれを拒絶する。浜田は、娘の姿に、今までの自分を深く反省し、許しを請う。由美はそんな夫を受け入れる。その後、会社は吸収合併で多忙になり、美弥子はサトルの元を離れていった。

1年後、浜田が去ったハヤシ食品で、上司から、趣味のスケートなどより、処世し上司におもね

るよう言われたサトルは、自分はフィギュアスケートで「スイスイ滑って」「クルクル回る」爽快感を得るために生きているのだ！と啖呵をきる。

その翌週に開催されたアマチュアフィギュアスケート大会で、浜田は身を入れ替えて家族のために働く喜びをサトルに嬉しそうに話す。大会で極め技「サトルッツ」に挑むサトル宛てに、前向きな自分を取り戻した美弥子から、サトルへの感謝と、再生を決意する内容のエアメールが届いていた。

「… だから、サトちゃん。そのときまで、絶対、絶対、スケート続けてね。大好きなスケート、ずっと、ずっと、続けてね！」